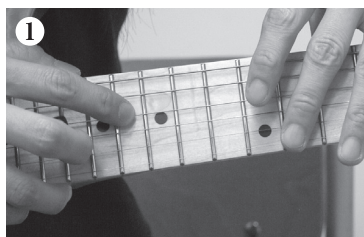


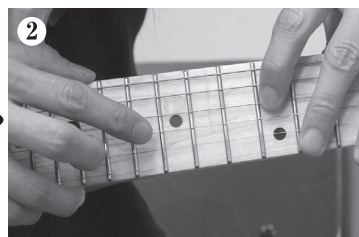
注意点1

両手タッピング時の
左手の使い方を覚えよう

80年代は、世界中のギタリストが我こそはと新しいテクニックを編み出していた。その中で群を抜いて異彩を放っていた高崎晃が編み出したテクニックが、この両手タッピングだ。まずは基本フォームを確認しよう。左手はネックの上から出して構えるスタイルとなっており(写真①&②)、右手のタッピング時にはミュートの役割も行なっている。ミュートは、左手の薬指と小指を使うと良いだろう(写真③)。左手は“中指&人差し指がタッピング”で“小指&薬指がミュート”という風に同時に2つの役割を果たすことになるが、一度慣れてしまえば、両方とも自然にこなせるようになるので頑張ってもらいたい。



右手のタッピング時には、左手でミュートをする。



左手によるタッピングでは、人差し指か中指を使用する。



ミュートは、左手の小指&薬指を使う。

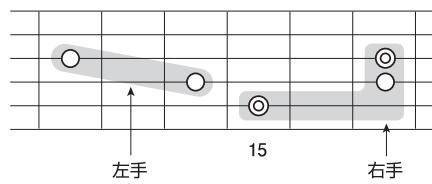
注意点2

両手タッピングの
基本的なポジション図

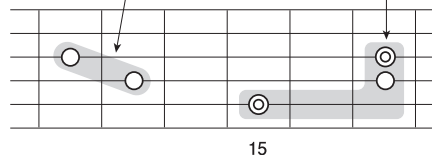
このフレーズは、コード・トーンをベースに、テンション・ノートなどの+ α 音で構成されている。まずは、このフレーズのポジション図を覚えてもらいたい(図1)。これが、両手タッピングの基本的なトライアド・フォームと言えるが、右手&左手を交互にタッピングさせるテクニックなので、通常のコード・トーンのポジションとは少し異なっている。左側2音が左手タッピング音で、右側のパワー・コードの形が右手タッピング音となっている。実際に弾く際には、右手&左手それぞれの押弦ポジションを確認し、そのあとに全体の流れを把握するようにすると良いだろう。

図1 両手タッピングの基本的なトライアド・フォーム

Cメジャー



Cマイナー

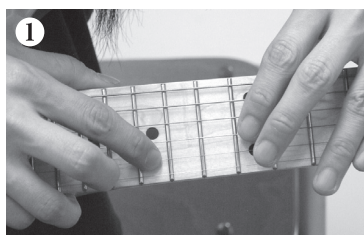


メジャーとマイナーでは、左手のポジションが異なる。

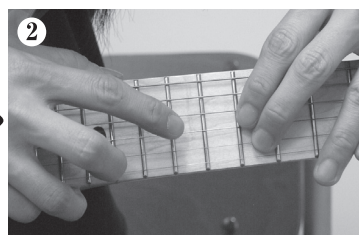
注意点3

打楽器を叩くような感覚で
タッピングを行なおう

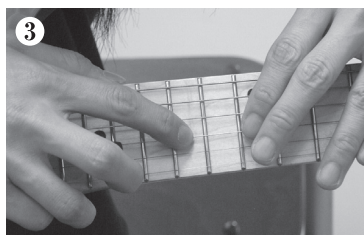
両手タッピングでは、右手&左手を交互にタッピングさせるため、打楽器を叩くような感覚を持つ必要がある。3小節目までは16分となっており、しっかりとコードの形を押さえながら移動することができれば良いだろう。4小節目は、6連符によるペンタ・フレーズになるので注意してもらいたい。写真は4小節目1拍目だが、2弦15フレットを右手でタッピングした時点で、次の左手中指による2弦12フレットのタッピングの準備はしておくこと。右手&左手を交互にタッピングするので、常に次の指を準備しながら弾くことが大切だ。また両手タッピングはブリッジが入らないので、タッピングしたと同時に指を真上方向に離すようにしよう。



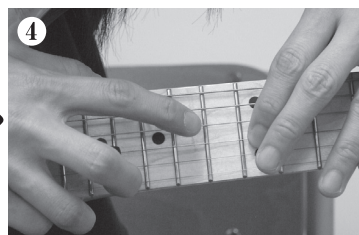
2弦15fを右手タッピング。次の左手の準備をしよう。



2弦12fを左手中指でタッピング。右手は3弦に移動。



3弦14fを右手タッピング。左手中指の準備をしよう。



3弦12fを左手中指でタッピング。ミュートも忘れずに。